

異分野の専門家と協創する哲学教育の可能性

—「写真×哲学」を事例として—

吉田幸司（クロス・フィロソフィーズ株式会社、上智大学）

1. はじめに

筆者は、哲学の専門研究の傍ら、さまざまな仕方で哲学を実践してきた。そのうちのいくつかは、博士論文提出後に個人として活動してきたものだが、2017年には、哲学を事業内容とした株式会社を設立し、現在は、法人としても哲学の事業を展開している⁽¹⁾。

本稿では特に、第3回哲学プラクティス連絡会でも発表した「写真×哲学」の事例について、哲学研究者の観点から報告する。また、それに関連する事例についても紹介しながら、異分野の専門家と協創する哲学教育の可能性について提言したい。

なお、「写真×哲学」の事例については、共催者である東京工芸大学芸術学部写真学科准教授の圓井義典氏も本書に寄稿しているはずだが、筆者は、圓井氏とは独立に本稿を執筆している。同一の事例にもかかわらず、筆者も寄稿するのは、同じ事態を別のパースペクティブから見たときに捉え方は異なると考えるからであり、両者にどのような差異が生じるのか、実験するためである。したがって、本稿自体が一つの哲学的な問いかけとなっている。もしかすると両者には異なる見解が記されているかもしれないが、読者には、それらの齟齬も含めて、筆者たち

の取り組みについて考えていた
だきたい。

2. 異分野同士の協創と相互限定

写真家や映像作家、美術家など、さまざまな分野のアーティストと協創的に哲学し、作品を制作する試みをこれまでにこなってきた。なかでも、「写真×哲学」については、2015年に、圓井氏とコミュニティを立ち上げて以来、継続的に、新しい哲学の実践に挑戦している。

圓井氏とは、共通の研究対象である A.N.ホワイトヘッドの哲学に関して議論するなかで、哲学とアートの垣根を越えた取り組みを始めるに至った。最初におこなった試みは、上智大学や東京工芸大学の学生および卒業生たちとともに、「哲学とは何か」「写真とは何か」について考究するものであった。W.ベンヤミンの「複製技術の時代における芸術作品」を精読しながら、

写真や芸術について対話する会を開催したり、哲学側メンバーが写真術のレクチャーを受ける会を開催したりした上で、哲学関係者と写真関係者、それぞれが写真作品とテキストを創作した。さらに、それらの作品を匿名にして展示し、各々の特徴について議論することで、哲学関係者の特徴と写真関係者の特徴を抽出し、「哲学とは何か」、「写真とは何か」を浮き彫りにしていった。

こうした企画は、予め計画して実施されていったわけではない。哲学関係者と写真関係者が意見を出し合うなかで、次第に、形式が生まれていった。実のところ、共同企画を実施する前に、哲学側メンバーだけで集まり、どのような企画にするか話し合ったことがある。しかし、その際に問題となったのは、「哲学とは何か」「哲学に何ができるか」という問題だったのである。

おそらく写真側メンバーは、

開拓の扉

写真に関する専門知識や、撮影の専門的な技術を有しているだろうと予想されたのに対して、哲学側メンバーが共同企画において何を提供できるのかについては、明確な答えが出なかった。もちろん、哲学や美学に関する知識は、哲学科の授業で習っているとはいえ、そうした知識をひけらかすことが哲学とは限らない。また、問いを提起したり、提起された問題について議論したりすることは、哲学科に所属する者に限らず、誰でもできることである。そうだとしたら、哲学科に所属することの特有性とは何だろうか、さらにいえば、哲学とは何だろうか。こうした問題が、哲学側メンバーの問題として浮上してきたのである。

こうした問題を抱えながらも、とりあえず、いつも哲学科でそうしているように、文献を精読しながら写真側メンバーと議論し合うことから企画はスタートした。その後の企画については、

その都度、話し合っていていき、最終的には、東京工芸大学と、上智大学メディア・ジャーナリズム研究所との共催で、公開シンポジウムを開催し、報告書を制作するに至った。

企画は、手探りで実施されていたが、そのなかで、哲学側メンバーの特徴について、いくつかの気づきが得られた。文献を精読して議論した際にも、写真作品とテキストを創作して議論した際にも、写真側メンバーが、撮影技術や写真史との関連性などに注目する一方、哲学側メンバーは、言葉の意味や、写真およびテキストの内容に関する解釈などに注目する傾向があった。また、写真側メンバーが、「写真とは何か」とか「写真家とはどのような存在か」について、自分の言葉で語るのに苦労していたのに対して、哲学側メンバーは、自身の考えを言語化して伝えることに長けていた。これらの特徴は、哲学のメディ

開拓の扉

アが言葉であり、意味や解釈、物語といった、言葉に関わる事柄が、哲学側メンバーの強い関心であることを示唆している。

だが、その一方で、哲学側メンバーは、芸術に関わる哲学や美学について学科で学んでいるにもかかわらず、写真側メンバーと議論してみると、写真芸術に関する知識が言葉として出てこなかったり、実際の写真家がどのようなことを考えているのかわからなかったりした。そればかりか、文献を精読し議論したにもかかわらず、そこでの経験を、実際に写真を撮ったりテキストを書いたりすることに活かしきれないメンバーが多かった。これは、今日の哲学の学びが、非実践的なものにとどまっていることの表れとも捉えられるかもしれない。

これら一連の試みが示すように、何らかの専門性をもつ異分野の者同士が、協働して作品を制作したり議論したりすること

で、相互限定が生じ、自分あるいは自分の専門分野の特性が浮き彫りになってくる。異分野の専門家と議論し、自らが何者でないかが規定されることで、自らが何者であるかも明らかになってくる。現在、筆者は、アーティストのみならず、天文学者やエンジニアなど、さまざまな分野の専門家と哲学している。そのように協創的かつ実践的に哲学することで、自らの体験に即して知が深まると同時に、さまざまな世界の現実にも即して知が拡張されていると実感している。

本節で述べた取り組みは、もともとは、自主的な勉強会程度に開始されたものだったが、より豊かな教育の現場を実現するための着想がいくつか得られた。次節では、2017年度から新たに始められた取り組みを紹介しながら、理論と実践を架橋する哲学的な思考の可能性や、アーティスト育成として哲学を活用す

る可能性について提言したい。

3. アーティスト育成のための哲学

2017年度の取り組みでは、圓井研究室から依頼されるというかたちで、研究室のゼミ生や、東京工芸大学写真学科を卒業した写真家の方々を対象に、アーティストのための哲学講座をおこなった。

具体的には、(1) 哲学・美学のレクチャー、(2) プラトンの『パイドン』『饗宴』、プロティノスの『美について』、カントの『判断力批判』の文献講読、(3) 参加者同士の哲学的な対話、(4) ライティングを組み合わせた総合的なアプローチで、アーティスト自身が哲学する場を実現した。これらには、アーティストが創作活動をおこなうに際して、(1) 語彙と背景知識を獲得し、(2) 理解力や問題発見力を高め、(3) 共感したり表現したりする力を養い、(4) 論理的に考えを

構成する思考力を鍛える狙いがあった。

こうしたアプローチは、哲学科での教育方法と変わらないと思われるかもしれない。実際、筆者の活動は、哲学対話や哲学カフェの動向とは独立したものであり、哲学専攻のゼミでおこなってきたこととほとんど同じことを実施しているに過ぎない。また、自分自身も、ファシリテーターという役割を演じるだけでなく、一人の哲学の研究者として、他の参加者と同様に議論に加わっており、現在の活動は、研究生活の延長でしかない。公開シンポジウムの実施や報告書の作成も、実績を作るという点で、研究者として必要不可欠なものである。

だが、「写真×哲学」の取り組みの新しさは、理論と実践を架橋している点にある。例えば、哲学科でも、ベンヤミンの「複製技術の時代における芸術作品」を講読する授業はある。し

かし、その担当教員は、写真家であるわけでも、映像作家であるわけでもない。写真史や写真論に関する知識はともかく、実践的な写真術、写真を撮るといふ経験を積んでいるわけではない教員がほとんどであろうし、受講生のなかにプロの写真家がいるわけでもないであろう。もちろん、テキストを読み、議論するだけでも得るものは多いが、写真の専門家を交えることで、より理解が深まるとともに、実際のアーティストの体験に即した知を獲得できる。平均化された一般市民ではなく、何らかの専門性のある者同士で議論することで、相対主義に陥ることなく、臆見ではない知が獲得されていく。また、テキストを読むだけでは頭でっかちの評論家になりかねないが、上手い下手はさておき、自身が実践してみることで、机上の空論の哲学ではなく、経験知・身体知に即した生きた哲学の営みにもなってい

く。写真家に限らず、さまざまな分野の専門家・実践家を招き入れて、共に議論することで、哲学の教育現場は、具体的な現実に即し、より豊かなものになると筆者は確信している⁽²⁾。

では、逆に、哲学の研究者・教員が、アーティスト、あるいは科学者やエンジニアを育てる教育現場で貢献できることは何であろうか。この点については、アーティスト側から書かれた圓井氏の原稿も参照していただきたいが、複数の芸術系の大学教員から、理論の部門と実践の部門が分かれているということを知ったことがある。本来、理論と実践は結びついているべきだが、実際には両者が結びついていない制度上の問題を指摘する者も多い。筆者は、「写真×哲学」の事例をはじめ、さまざまな分野の専門家とコラボレーションしてきた経験を通じて、哲学は、そうした理論と実践を架橋する媒介になると考えている。

開拓の扉

2017年度の「写真×哲学」の取り組みに即していえば、筆者は、写真家の参加者たちに、自ら問い思考することを促した。文献を読む際にも、毎回レポートを提出してもらおう際にも、単に理解を示すのではなく、問題を発見してもらおうようにした。さらに、その問題に対する自分の考えを記述する際には、自己批判的に思考するように促し、メタファーや詩的表現を使う際にも、それが何を意味するのか、なぜその表現を使うのか、説明してもらったり、論述に論理的な飛躍がないか反省してもらったりした。一般的な哲学対話が「黙っていてもいい」とか「答えに窮しているときに追い込まない」といったルールを重視するのに対して、筆者は、全員に発言してもらおうように話を振ったり、また、敢えて難しい問題に追い込んだりもしている。その厳しさに、途中で会を離れていくものもいたが、最初から最

後まで参加していたものは見違えるほどに成長し、自らの作品のコンセプトや作家としてのスタンスについて自らの言葉で表現できるようになった。このように、哲学的に思考することは、アーティストに対して、理論と実践を結びつける役割を担う可能性を秘めている。

なお、黙っている人に話を振ったり、難しい問題に追い込んだりする姿勢が、直ちに、セーフティーな環境やケア的な対話に反するものであるとは限らない。本当は発言したいのに黙っている場合もあるだろうし、敢えて難しい追い込まれることで次なる思考にステップアップできる場合もあるだろう。この点について筆者は、参加者の様子や背景知識に十分配慮しながら進行している。

以上の2017年度の活動の成果は、写真家、平間至氏の協力を得て、平間写真館 TOKYO でシンポジウムを開催して公開し、

開拓の扉

40名ほどの来場者とともに、「写真とは何か」「写真家とはどのような存在か」「アーティストに言語は必要か」といった問題について話し合った。とりわけ、「優れた写真家は、みなさん、優れた言葉をもっている」という平間氏の発言が、印象深く、筆者の記憶に残っている。

2018年度、「写真×哲学」の活動は、他の法人も巻き込みながら、さらに規模を拡大している。アーティスト＝写真家たちが、一つのグループとして継続的に哲学しながら創作活動をしていく試みは、写真界においても斬新な試みであるようで、この活動に加わりたいという同志も増えている。本稿の読者にも、筆者たちの取り組みについて共に考えていただければ幸いである。

4. おわりに

以上、「写真×哲学」の事例を中心に報告しながら、異分野の

者同士が協創し相互限定することの意味や、理論と実践を架橋する哲学的な思考の可能性、アーティスト育成として哲学を活用する可能性について述べてきた。

本稿では、主として写真家の事例について扱ってきたが、本文でも触れた通り、同様のことは、他の分野にも応用可能である。現に筆者は、東京工芸大学の写真家以外の写真家や、映像作家、美術家、コピーライター、天文学者、エンジニア、スタイリスト、経営者などと協創的に哲学しているし、筆者自身、社会人落語家として、落語と哲学を融合する試みをおこなっている。法人としての活動でも、大学や学会での研究・教育活動だけでなく、自らの専門研究の成果を実社会に還元できるように哲学を実践するなかで、さまざまな場面で哲学が必要とされていることを強く実感している。本稿で扱いきれなかった他の事

開拓の扉

例については、稿を改めて報告したい。

註

(1) 本稿で主として報告している「写真×哲学」以外の活動として、以下のようなものがある。1. 哲学の情報を配信する「哲学舎」の制作・運営、2. ホワイトヘッド哲学のメディアアート表現（2016年11月20日に東京大学駒場キャンパスで開催されたUTCPで公開）およびインフォグラフィック化、3. 落語の実演に哲学を取り入れる試み、および「落語×哲学」の講座（上智大学のコミュニティ・カレッジ）や講演（日本大学芸術学部）、4. 東京女子大学の学生たちを中心とした「東女哲学サロン・スピラル」の創立と運営、5. 「シミュレーション図」の制作の協力、6. 哲学を活用した人材育成、チームビルディング、コンサルティング、コーチングなどを事業内容にした株式会社の経営。その他、写真ギャラリーのPGI

や、六本木ヒルズのアカデミーヒルズなど、さまざまな場所で哲学のワークショップやトークショーを開催している。

(2) 筆者は、東京女子大学でも、対話する授業や、専門家を交えた哲学教育を実施してみた。授業では、講義だけでなく、毎回、生徒同士で対話する時間を設けたり、生徒からのコメントペーパーに十分な時間をとって回答したりしている。また、東女哲学サロン・スピラルのメンバーたちと国立天文台に行き、宇宙に関する展示物を見学したあと、天文学者とともに「無」や「存在」について対話したり、プロのスタイリストとともに「美」や「ファッション」について対話したりする会を開催した。